

# 針葉樹会報

第87号  
1999年1月



## 目次

私の山登り	.....	森 一則	1
落とした針葉樹章	.....	林 正敏	3
喜寿を迎えて	.....	間々田良雄	3
ノスタルジアとしての山	.....	真木淳一郎	4
中?樹会のこと	.....	望月 敏治	6
私についての針葉樹会	.....	南 昌宏	7
冬日雑感	.....	松尾 寛二	7
マックス・ウェーバーとユダヤ教と赤唐辛子	.....	蛭川 隆夫	8
山岳マラソンの記	.....	西牟田伸一	9
くぬぎ山	.....	井草 長雄	10
引地君送別会	.....	米田 篤裕	11
古き良き部室を悼む	.....	石原 脩	12
部室再建計画の経緯と現状	.....	部室再建担当幹事	13
会員からの便り	.....	須山修平、関 恒義、 塩川清彦、田中一雄	15
編集後記	.....	塩川清彦、田中一雄	15

発行日 1999年1月22日  
発行者 針葉樹会  
印刷所 ヤマノ印刷(株)

## 針葉樹会報 第87号

編集人 中村 保  
〒156-0043  
東京都世田谷区松原6-3-21  
編集委員  
倉知 敬、遠藤晶土  
井草長雄



## 私の山登り

森 一則（昭17）

私はもう八十一歳。元気ですが腰痛としびれで歩行困難、残念ながら山登りはできません。

私の生まれは、九谷焼本場の石川県寺井町で、ここから眺める白山はとても優雅です。自転車で小松中学に通い、一年生の夏休みに九歳年上の兄につれられ白山に登った。これが私の最初の山登りで、次は三年の時、やはり兄と一緒に立山登山をした。その後、大阪商大高商部一年の夏、同級生と二人で富士山に登った。これで日本三名山の登山は終わった。

この年の十一月、高商部のクラス対抗陸上競技会があり、私と金沢三中出身の級友と一緒に出場した。二人とも中学時代陸上競技の選手だったので、一年B組（第二外国語がドイツ語）として優勝旗を獲得した。

しかし私は、御岳山の単独登山を予定していたので、クラス会での祝杯もそこそこに、

大阪駅から夜行列車に乗り翌朝木曾福島で下車、王滝村を通り五合目の小屋に着いた。しかし人もいないし水もなく、やっとつららを探して飯盒で飯をたいたが、米をといでないので不味くて食べられずそのまま寝た。

翌日、朝早く起きて頂上に登った。積雪はかなりあったが、雲一つない晴天で、乗鞍岳、穂高岳、槍ヶ岳、八ヶ岳、浅間山、富士山、北岳など実に見えるにきいに見えた。とくに、木曾駒ヶ岳がすぐそこにあるので、「よし、この山も登ろう」と決心し、滝のある道を下り、その日はともかく駒ヶ岳のふもとに泊った。

翌日も天気がよく、登り下りも割合簡単で、頂上近くの岩に白い雷鳥がいるのを見た。

二年の春、友人と二人で大峰山に行った。ここは修験道の重要な行場（霊場）で、私も鉄鎖の岩壁を登攀し、絶壁の上に身体を投げ出し、脚を押さえてもらい、両手を伸ばして修行した。この山は今でも女人禁制になっているという。

夏休みには、単独行で大糸南線の方から白馬岳に登った。雪渓が大きくお花畑がきれいだった。帰りは反対側を降り黒部峡谷に出た。川のふちに温泉が出ていたが入らなかった。

秋、数人のクラスメイトと一緒に、ブナの

巨木の並んでいる大台ヶ原に登った。原生林の静けさが印象的であった。

三年の夏休み、ハイキングで知り合った女性（エーデルワイスのメンバー）と相談し、お互いの友人、男四人女三人の計七人で北アルプスへ行くことにした。

大阪駅を夜行で出発し翌朝大町下車、針ノ木峠を目指して雪渓を登ったが、段々傾斜がきびしくなり道を間違えたことがわかったので、一挙に下山し雪渓の下の大沢小屋に泊る。お客は我々七人だけだったので、みんなで話し合うことができたので、みんな

翌日は間違いなく峠を越え、黒部川の平の橋を渡り、五色ヶ原から立山、劔岳と山小屋に泊りながら登山し、最後は立山温泉に一泊して富山に出た。私は郷里の石川県寺井で下車したが、この山登りは愉快だった。

スキーはこれまで琵琶湖の北のスキー場に行っていたが、この年の十二月、友人三名と一緒に乗鞍岳のスキー小屋に泊り練習した。なお、小屋の主人から熊の肉を貰って帰った。

東京商大学部一年、五月、大阪時代の友人と一緒に乗鞍岳でスキー練習。

七月、新宿から夜行で出発。甲斐駒ヶ岳単独行。登りは随分人が多い。頂上から反対側を下り早川尾根に出た。道幅が狭いので落ち



ないように、尾根の木に自分の身体を縄でつないで暫く眠った。水音が聞こえてくるが、下に降りられないので水も飲めない。やっと小屋に着いたが誰もいない。一泊して鳳凰山に登り下山。列車も混んでおり床に座って寝た。家に帰ったが疲れがひどく、二日間学校を休む。

十二月、友人と二人で乗鞍岳に行く。肩の小屋にスキーをおいて頂上に登ったが、帰りは吹雪のため小屋が見つからず崖の下に休んで約三時間。夜になって運よく吹雪も止み月も出て小屋は直ぐそこ。スキーで下山した。ところが下の方に明かりが見えた。これは私達の帰りが遅いので、救難のため出動して頂いた一橋山岳部の方々に、これを機会に私は入部させて頂いた。以下はその記録。

二年の五月、同級の山田がリーダーで、前田と一緒に上高地から西穂高の稜線に登り、雪洞を掘ったが、天候不良のため雪渓をグリセードして上高地に下り、二日後天候回復し槍の頂上に登り、穂高を縦走。

七月、樋口と二人で針の木峠を越え、五色ヶ原で前年遭難した友田の追悼碑除幕式に参加、そのあと薬師岳から黒部川に下り河原でキャンプ、源流から三俣蓮華岳、さらに槍ヶ岳に登り徳沢、上高地に出る。

十月、学校の部室にいた処へ、甲武信岳に

行った前田ら遭難の報があり、直ぐ準備して出発、翌日甲武信岳の小屋に到着、その翌日笛吹川東沢の林の中を捜索し、山田が縦走路から約三〇〇メートルの処で一人、私は縦走路の直ぐ横で二人、ともに遺体を発見し報告のため別々に下山、翌日は地元の協力で遺体を運び葬式を行なった。これは急激な寒風雨の襲来が原因で、誠に悲惨な事故であった。

三年の五月、鹿島槍ヶ岳、鎌尾根を部員大勢で登るが、余り思い出がない。

七月、徳本峠を重いリュックをもつて通過、徳沢を経て涸沢池の平でベースキャンプ。滝谷での岩登りのため底に下りて眺めた空はすごく小さい。また、前穂高の雪渓からのグリセードはすごく長かった。十日以上多くの部員との生活は実に楽しかった。

帰りは上高地で皆と別れて私一人、安房峠を越え平湯温泉に一泊、高山へのバスに乗れる処まで相当長く歩いた。途中、昨日の飯盒の飯は一寸においがしたが、食べても別に何ともなかった。これで一橋山岳部の山登りは終わった。

八月、大菩薩峠に一人で登る。炭焼きの人と仲良くなり、仕事を手伝い炭を土産に貰った。二回登った。

(我々は学業を六ヶ月短縮され、昭和十七年九月に卒業し、十月に軍隊に入り、私は終

戦後間もなく帰郷した。二十二年上京し商社に就職、主として中国、北朝鮮貿易を担当したため海外生活が多く、山登りは次の通り非常に少ない)

一、昭和三十二年五月 夜叉神峠(社員と

一緒に)

二、昭和三十八年八月 蓼科山(家族と一

緒に)

最近では、平成八年五月、ヨーロッパ旅行の際、スイスのユングフラウヨッホに登山電車で登った。

#### ..... 会員からの便り .....

#### 須山 修平 (昭30)

富士を眺める山歩きをしています。先日、笹子へ本社ヶ丸へ鶴ヶ鳥尾山を歩いて来ました。三ツ峠の北に連なる山です。快晴に恵まれ、道志の山々、南アルプス、甲斐駒、八ヶ岳、大菩薩嶺と大パノラマを楽しみました。

次は、天候を考え西側か南側からの眺めを楽しみにしています。



## 落とした針葉樹章

林 正敏（昭17）

小物を入れてある小引出しから日用品を引き出すはずみに、針葉樹のバッジの入った小箱が顔を出した。この針葉樹章は戦後、昭和二十年代に針葉樹会から新しく貰ったものである。

学生時代、わたしが山岳部から頂戴した針葉樹章は、奥秩父の破風山から雁坂峠へ下る縦走路に落としてしまった。昭和十六年十月十八日、甲武信で遭難した前田、古沢、長沼の三君捜索のさなかのことである。

木賊の小屋にいる捜索隊から麓の広瀬の本部に急使が立つことになり、地元の警防団から応援にきていた中の一人と組んで、縦走路伝いに雁坂峠への下りを駆け下りるようにとばしていた。ブッシュに頭をはねられる一瞬、襟の針葉樹章がとびはねたのが分かったが、共に走るようにあとを追っている警防団の人に待ってくれと言うわけにはいかなかった。

戦後、わたしは大半を北海道に過ごし、たが、幸いに昭和四十二年、笛吹川東沢出合いの三君追悼碑除幕式には出席することができた。

同君達が遭難したのは、悪天候のなか雨門の滝を越え、釜の沢（記憶違いかもしれぬ）の厳しい沢登りを詰めた所で、木賊の山頂付近の縦走路まで、古沢君は三百米ほど下の木の株を枕に、前田君と長沼君は縦走路から二十米もない這い松群の上に眠るように横になっていた。

東沢を詰めて木賊山への沢筋を、木賊山一帯の這い松原を、捜索を続けた月日が思い出される。くる日もくる日も晴天の下を、重い、厳しい毎日だった。そして雁坂峠を経て広瀬の部落に下った。

あの捜索のあいだ、温かく面倒をみてくれた広瀬の部落は跡形もなく、あの頃の雁坂峠に向う道順も何処にも見当たらなかった。

わたしのあの針葉樹章は、故前田、古沢、長沼三君遭難捜索の思い出と共に、破風山から雁坂峠への、あの下り坂に今でも残っているはずである。この新しい針葉樹章よりも少しズッシリと重かったような気がする。



## 喜寿を迎えて

間々田 良雄（昭21）

今月十一日に満七十七歳の誕生日を迎えて如水会館レストラン「ジュピター」で妻とささやかな夕食を供にしたところです。今日まで大した病気にも罹らず過ごせたのは、両親・妻・先輩・友人をはじめ見えない多くの人々のお蔭と感謝の心境です。

顧みれば、昭和十五年（一九四〇）四月、東京商大予科入学、山岳部に入り、春・夏・冬の合宿や山行きに参加したことは、東京下町育ちの私に自然の美しさ厳しさを体験する貴重な機会を与えてくれ、その後の人格形成にも大きな影響を受けたと考えます。

やがて学部二年目の十二月、文科系学徒に対する徴兵延期停止で海軍入隊、武山海兵団を経て横須賀航空学校を卒業し、少尉に任官、昭和二十年三月（一九四五）軽巡洋艦「春月」に乗り組みを命ぜられ、航海士として艦橋（ブリッジ）勤務となりましたが、同年八月十五日、朝鮮釜山港埠頭に繫留停泊中、敗



戦の詔勅により徴兵解除、直ちに復員復学を許され、焼け残っていた中央線西荻窪のわが家に辿りつき、学部三年に復学することが出来ました。

当時の食糧事情は最悪で、栄養不足のため、国立に通うのも容易ではありませんでした。殆ど図書館に入りびたりで、やっと卒論をまとめ翌年九月に卒業、十月旧三井物産(株)に入社できほっと一息つくことが出来ました。

ところが入社二年にも至らぬ二十三年(一九四八)三月に突然占領軍GHQによる三井・三菱財閥解体司令を受け強制的会社解散の憂目となり、全社員失職、小さな百以上の会社に各自伝手を頼って参加し、新生三井物産に大合同出来たのはなんと三十四年(一九五九)二月のことでありました。

大学生・軍人・社会人として戦争・飢餓・失業という波瀾万丈の通算約二十年間の経験は、私に「人生何時何が起るか分からない」、自分自身による選択裁量の余地は案外少なく、何か見えざる神の手に依り生かされているのではないのかと考えざるを得ないこの頃です。

「たった一度の人生だから、自分の好きなことを勝手放題やれば幸せになれる」と言うようなコメントに接することが屢々ありま

す。至極もつともなこととも云えますが、反面や、「平和ボケ」、「短絡的エゴイズム」、「人生そんなに甘いかな」とも思われます。如何でせうか。

## ノスタルジアとしての山

——ある地方会員から

真木 淳一郎(昭22)

### 一 山との係わり

先日他界した倉田隆文君(ノリタケズ・社長(会長)の言う通り(地方会員には何のメリットもないのか針葉樹会を脱会した由)、小生は送付された会報だけは保管し、時々目を通すだけの地方会員であるが、卒業後社会人として山に係わった思い出を、自分史の一端として記録に残しておくことにしたい。山岳部員としての回想録は「学部入学五十周年記念文集」に綴ったところである。

### 〈学徒追徴で応召期間中のことに就て〉

九州は唐津訓練隊、「虹の松原」の景勝地が演習場、砂浜ではふく演習はきつく、重装

備の行軍演習も辛かった。時には女人悲史の鏡山へ登高行軍が行なわれる。たかが標高五〇〇米位の丘陵であるが、皆アゴを出し落伍者が出る。この時ばかりは、短躯劣等感から解放され嬉しくてしようがなかった。勿論訓練であるから楽ではないが、鼻唄を唄いたいたいような嬉しい気分になったこと、何故だか忘れられない思い出である。

### 〈卒業後の会社勤め(名古屋松坂屋)のクラブ活動は山岳スキー部へ〉

四十歳を過ぎた管理職の時、八ヶ岳赤岳への登山に参加した。かつて山岳部員の時、十一月の赤岳へ樋口君等と登ったところ。新雪のラッセル難行でやっと小屋へたどりついた思い出の、その赤岳小屋泊りの夏登山。若い女性軍二十名と男性十名位のグループ、せまい一部屋でザコ寝の夜となった。

女性群と接する境目の男子席だけは、山岳部長の責任で指名する必要がある、最年長で研修課長という役職柄権威あり且つ人格高潔と思われる小生に白羽の矢が当る。参加者一同、その公正なる人選に誰一人疑いも反対もはさむ者なく、二人一組の布団を並べた。男女とも大体年の順に従い位置に就き、境界線一枚の布団にオールドミスと女性と同衾する。勿論、チョツカイは出せないまま、もじ



もじうつらうつら、まんじりともしない夜明けを迎えた。

へ年に一度同期入社ของกลุ่ม数名で、二泊三泊の観光旅行へ

輪番制の幹事が、積み立て予算の範囲内でプランを立てる。小生幹事の番、その特権で温泉などの名所旧跡巡りは年とってからと宣告し、元気なうちは山へ登るプランをと、戸隠山を選んだ。

修験者の修行の岩場、鎖や梯子を伝い、それなりにスリルと汗をかく山行きであった。麓の宿は紹介された宿坊で、手打ちの本格的信州そばに舌づつみを打ち、五右衛門風呂で疲れを癒した。いつも按摩かパン摩を呼ぶのを楽しみとする仁が按摩を頼んだところ、修験者の接骨師を呼ぶというのでおそれをなして断った。

大変ユニークで面白い旅だったという者と、恨めしい想いで二度と行きたくないという者と、評価が分かれ、小生には幹事が回って来なくなった。

へ家族旅行で御嶽山へ

知多半島の海岸に住んでいたの、海水浴の夏休み、子供連れの家族サービスは知らずに済んだ。しかし一度位山へ連れて行こう

と、秘境濁河温泉への初めての家族旅行。

高山線の、とある駅から当時は舗装のない凸凹道をバスで一時間余、木曾御岳の懐に眠る山のいで湯と紹介されたが、バラック建てのお粗末な旅館で、暗いランプの風呂場など、妻の期待とは程遠い設備と雰囲気。家族旅行とはいえ新婚旅行以来の旅だった。

その妻を置いて、中学一年になった息子を裏御岳の登りに誘った。御岳講などで賑わう木曾高原表側の登山道とは異なる急峻な路なき山路に、おやじはアゴを出し、先導案内役の役目を放棄し、息子の後をやつとの思いで頂上にたどりついた。妻の期待に比べられず、おやじの権威もいささか失墜したのか、その後家族旅行のことは話題にのぼらなくなった。

へ山もスキーも行かなくなった

小生のにがい経験（乗鞍高原スキー場での宙吊り）から、スキーだけは息子に早くから経験・訓練させようと、中学時代のスキー合宿にはつとめて参加させた。おかげでスキーの醍醐味を味わえるようになったと言う。

山へもスキーへも行かなくなった小生は、スペインサー・トレシーのガイド役の「山」と題する映画を皮切りに、戦後ヒマラヤなどの初登攀撮影のTV記録映画に感激したが、最

近はその機会にも恵まれなくなっている。何故だらうか。

二 再び西穂に見えず

五年前の十一月、学部入学五十周年記念大会が下呂温泉で行なわれた折、岳友樋口、野尻両君と有志二名を誘い、高山から新穂高温泉まで足を延ばした。そこからは、千石尾根沿いに架設された新穂高ロープウェイを利用すれば、一時間余で西穂山荘へたどり着く西穂高への最短コースである。

山へ登らなくてもロープウェイで穂高、笠などが間近に眺められるのを期待しての山岳観光である。折りあしく年に一度の連休期間（保守点検のため十一月中旬一週間位）にぶつかり、ロープウェイは断念したが、せめて名物の露天風呂天国に浸ろうと、総勢五名で奥飛騨旅情の一夜を過ごし、翌朝露天風呂から穂高越しに槍を遠望して別れた。

ことしの全国大会は、その時の仲間、永井、樋口、奥村（故久保先輩と山行を共にした準会員）が幹事なので、小生も名古屋から応援にかけつけた。腰痛のため山へ登れなくなつた樋口君は山の温泉巡りしかできないと嘆いていたが、彼の情報源から松本市郊外扉温泉が選ばれたかと思う。



松本から奥飛驒温泉郷、高山へは安房峠を越せば行けるが、十一月になると積雪で不通になる。ところが安房トンネルが貫通したので、松本発の急行バスを利用すると、二時間で新穂高ロープウェイに直行できるようになった。チャンス再到来、有志四名に大会に馳せ参じた妻夫妻（旧姓赤星君、韓国から特別参加）を加え、新穂高温泉はホテル氷壁（村営の安宿にしてはしゃれた名前、一万四千元で露天風呂と奥飛驒料理にご満悦）に泊る。

今回はまともに台風十号の襲来にぶつかり、安曇野巡りのバスツアーも終日の雨で折角のアルプス、八ヶ岳の眺望は楽しめなかった。乗鞍スカイライン―上高地―松本へ戻る欲張ったスケジュールなので、始発のロープウェイに乗る予定だった。スカイラインは台風危険のため運行中止なるも、ロープウェイはOK、二階建の観覧車に搭乗するが、終点まで視界全くゼロなり。この雨の中、往復とも満員長蛇の列にはびっくりした。紅葉シーズンの予約で日程変更できない観光客で一杯。

雨の上高地も観光バス客で盛況。帝国ホテル前で途中下車し、ホテル食堂の豪華昼食（といっても三千円のハヤシライス）でうっ憤を晴らし、濁流梓川沿いに河童橋まで雨中行軍、山を見ざるドシャ振りの旅で終わった。

## 中？樹会のこと

望月 敏治（昭25）

何年ぐらい前か、また誰が言い出したかはつきりしないが、針葉樹会の名をもじって表題の会が発足した。当時は針葉樹会の中堅を手前勝手に自認して名付けられた筈なのだが、今や全員が還暦はとくに過ぎ、古希を通り越し或いは目の前にした連中ばかりである。いかに高齢化社会とは言いながらその齢で中堅とはいささかおこがましいのではないか。翁樹会の名前こそ相応しいといった陰口も聞かれそうである。昭和25、28年の集まりで、年2回ぐらいの山行きと毎年1月下旬の乗鞍高原スキーを年中行事として今日まで続いている。

一橋山岳部の長い歴史の中にあつて時代を区切るとすれば、我々はいわば戦後派の最初のグループに属する。そして当時の活動状況は、「針葉樹」第十一号誌上で小泉によって記述されているが、今回再読してみても懐かしい記憶がよみがえってくる一方、個人的には己

の貧弱な山行実績に忸怩たる思いも残る。

山どころではないといった戦後の混乱の中で学生生活を送った私達は、今もつてその輝かしい足跡が語り継がれている戦前の諸先輩と、我々以降に一橋山岳部の隆盛を築き上げた後輩諸君との間に挟まれた鬼つ子のように思うことがある。弁解がましく言わせてもらえば現在では到底考えられないような無い無いづくしの合宿或いは個人山行であった。

中樹会の時々の集まりでは「我々は非力であったが、一つの時代から次の時代への橋渡しに一端の役割を果たしたと言えるならば、あの困難な時代の登山事情は之を記録として残す責任を負っているのではないか」ということを話題にすることがある。この年齢になればおぼろになる前にその責務を果たす機会があることを願っている。

差し当たって我々の次のスケジュールは1月24・25・26日の乗鞍スキーになる。今から木立山荘の露天風呂を楽しみに待っているとこゝろである。





## 私にとっての針葉樹会

南 昌宏 (昭28)

それまで全く山登りの経験がなく、予科入学当初は野球部員であった私が予科二年の夏に山岳部に入部して以来、近い先輩後輩と山岳部生活をともし、卒業してからも山を通じた交遊が続き、自慢できるような登山歴はないものの、わが人生に貴重なものを得たとしみじみ感ずる。

私の場合、小学六年の十二歳のとき戦争が始まり、東京から新潟県糸魚川に疎開、中学三年の十五歳で一年近く工場動員、終戦後復学、一年半後旧制中学卒業、昭和二十二年予科に入学した。

雪国での慣れない疎開生活や工場動員での建設工事の雑役労働で、復学後に結核性リンパ節炎にかかり外科手術を受け、軽度の栄養失調症状も出た。

終戦直後の旧制中学には山岳部は勿論、運動部はなく、疎開組中心で野球部を創設して半年ほど活動した。山は遠くにあつて眺める

だけの存在であつた。この雪国での三年間の生活体験が山岳部員としての下地であつた。このような生半可な素性の部員でも仲間になれる山岳部であつたことに心から感謝する。

当時の山岳部は装備や用具が殆どないに等しく、あつても数が揃わない状態で、これらの整備が急務とのことで寄付集めが大事な部活動の一つであつた。まず針葉樹会員名簿を整備して、手分けして先輩を訪ね、寄付をお願いした。大先輩や若い先輩を訪ねた部員がそれぞれ伺つた現役当時の自慢話や現役部員に対する説教などを部室で語り合いながら、これまでの山岳部の歴史とともに卒業後の社会生活にも思いを馳せた。

針葉樹会の先輩とのつながりを身近に感じたのは寄付集めからであつた。私のゼミナールでの卒業生名簿整備や会誌創刊なども丁度この頃だつた。終戦後の混乱から漸く落ち着きを取り戻した時期だつた。

私達の後からは高校で経験を積んだ後輩が入部してきた。時代が先輩とこれら後輩をつなぐ役どころを私達世代に課したように思える。つなぎ役なくして長い歴史はない。それが私の針葉樹会員としてのささやかな自負である。

(一九八八・十一・八)

## 冬日雑感

松尾 寛一 (昭31)

11月27日金曜 (曇)

日本近代美術館に中村画伯 (昭28、中村正司氏、通称M中さん——编者注) の個展を見に行く予定だったが、仕事の都合で行けなくなった。M中先輩の絵には見る人の心を和ませる何かがある。如水会報の扉を飾つた「漁村夕景」もそうだ。

へ美しい夕映えに彩られた浜辺の作業小屋の中では、今日の最後の仕事だろうか数人の男女が働き、遊び相手のいない小犬が好奇の目を輝かせながら佇んでいる。そこには心地よい緊張と平和な空気が流れ、夜の安らぎを約束している。

個展の案内状をねだっておきながら見に行かず、申し訳ないことをしてしまった。

同日 6時 (如水会館・梧桐にて)

佐薙が七年の米国勤務を終えて帰ってきたので、歓迎会。佐薙、上原、尾身、春日井、榎



沢、柴崎、高崎、宮川、松尾が出席。まずは佐薙の帰朝報告。

佐薙「あちらでの山行報告は別の機会にゆずるとして、最近気になっているのは日本企業の特異体質で、例えば株式会社代表者が前任者からの禅譲または推薦で決められることが多い。しかし、株式会社としては奇妙なことで、何時からこのような習慣が何故定着したのか興味を持っている」

このお堅いテーマに、大学院で監査役の研究をしている上原はじめ、実際に監査役を経験してきた各氏から意見が続出した。

佐薙「話は変わるが、最近のテレビは例の毒薬事件のオバハンのニュースを延々と流している。ちよつとおかしくないか」。

……談論風発、尽きることなく。ビールはすぐになくなる。ピーフステーキなかなか旨い。

高崎「部室の傷みがひどいので移設、改築を計画している。針葉樹会でもいろいろ協議しているが、皆さんも意見を出してほしい」。

それで私の意見ですが、部員が2、3人では、利用者の少ない部室より、山小屋を建てたらとの意見が出るのも尤もですが、部室はやはり残してほしいと思います。後輩のために。

私は、ヤツケを着て「山はいいですよ」「水がまた旨い」という中村先輩のトボケタ勧誘に惹かれて入部しました。合宿は半分位しか参加せず単独行も少ない私でしたが、部室には毎日行きました。それでも、仲間として付合ってもらえたとし、時折現れる先輩の話も楽しかった。

可さんの人生哲学がさらに味わい深いものにした。「一橋だけが大学じゃないよ。山岳部だけが仲間じゃないよ。もっと自由に考え行動し、お互いに幸せになればいい」とも言われました。

新しい部室が出来たらワンゲル部などにも開放したらどうでしょう。合同コンパや合同山行を提案したらどうでしょう。どの部の部員も、もともと自然が好きで連中だろうから、話は合うだろうし、山岳部への理解が高まり、なかには山岳部に転向するものが出るかも知れないと思うのです。要は裾野を広げるのです。

ついでに針葉樹会への提案。時には立食パーティーしたら如何でしょうか。座敷で隣の会話が途絶えると時間を持て余してしまいます。自由に席が変われる立食のほうがいいと思います。

## マックス・ウェーバーと

## ユダヤ教と赤唐辛子

蛭川 隆夫 (昭39)

あるとき高橋 (昭和38年卒)、小野 (同40年)、蛭川 (同39年) の三名が「みね」でお酒を酌み交わしているところに、偶然にも山本さん (同32年) が立ち寄られ、一同で伯耆大山 (一七一メートル) に登ろうと決しました。どうせなら出雲大社の前で悠々と第二の人生を送っている岡垣さん (同33年) のところまで足をのばそう、また広島在住の村上さん (同39年) から招待を受けていた名和さん (特別会員) も加えようということになり、かくて総勢七名がこの三題噺の登場人物となりました。

東京からの五名がワゴン車で出発したのが平成十年九月十日の夜。運転を交代しつつ西下すると、翌早朝にはもう米子に着いていました。名和神社 (名和さんの祖先を祀ったところとか)、小泉八雲記念館などを見物しながらさらに西に走って岡垣さん宅に至りました。出雲大社を案内していただいたところ



に、名和さんを迎えに村上さんも到着し、一同で本物の出雲蕎麦をご馳走になりました。登山組は、銅鐸、銅矛、銅剣で有名な荒神谷遺跡や和鋼博物館を巡ってから、大山の麓の宿坊に泊まりました。

登山の日は好天で、大勢のハイキング客が行き交う山道を辿って登頂。最高峰の剣峰には行きませんでした。山靴に長年痛めつけられて痩せ細ってしまった登山道が左右に切れ落ちて、そこは「登山禁止」でした。自然に親しむ行為が自然を破壊することに、複雑な気持ちになりました。大山寺、大神山神社（いずれも一見の価値があります）への参道を下山路にして駐車場に戻りました。

隠岐へ向う山本さんを米子駅まで送ってから、車を再度西に向けて広島に至り、村上さんのご配慮で広島の名酒を聞こし召しました。翌日は、宮島の弥山に登り、村上さんの会社の本社ビルを表敬訪問し、さらに赤穂まで走らせて一泊。

五日目は、琵琶湖の東岸をゆったりとドライブしたり、永平寺に詣でたりしてから、深田久弥ゆかりの荒島岳（一五二三メートル）の麓にある民宿「林湊」に宿を取りました。ここは、実に一泊二食五千円で、飲んだビールを自己申告で支払わせるとか、昼飯のお握りは非常食にすぎないとして請求しないと

か、驚きの宿です。この軒先に赤唐辛子が吊るしてあったのですが、この習慣は古代ユダヤ教のしきたりがはるか極東の地にまで伝えられたものとのこと。これは、古代歴史学・考古学・神話学・言語学に造詣のある高橋さんがマックス・ウェーバーを引用しつつ説いてくれたものです。高橋さんのホームページ <http://village.infoweb.ne.jp/~twit4308/> にアクセスすると、この知的で刺激的な題目の謎が解けます。

さて、荒島岳はあいにくと台風の接近で強い風雨と雷の中の登山となりましたが、二人の百名山患者と、東京単身赴任の間のできるだけ青森以西の山に登っておきたい北海道人にとっては、満足でした。濡れて冷えた身体を「林湊」での熱いシャワーで癒してから、岐阜県の蛭ヶ野高原の民宿へと車を急がせました。

最終日は、高山で朝市を楽しみ、平湯からは最近竣工した新安房トンネルを利用してあつという間に中の湯へ抜けました（今後は、北アルプスへのアプローチの仕方も変わりそうです）。あとは、台風を追いかけるようにひたすら中央道をとばしました。

車での山旅は自由度があつていいものです。平成十一年には同じ形態で四国の山に行こうと考えている小野と蛭川ですが、同行を

ご希望の士がいましたら是非ご一報を！

## 山岳マラソンの記

西牟田 伸一（昭47）

今年の夏休みは50歳の特別休暇を取得し、山岳マラソンのハシゴを計画実行した。七月下旬次男と共に八ヶ岳全山往復2日間を目指した。丁度中間とおぼしき黒百合平にテントを張って、一日目は南に権現まで、二日目は蓼科までそれぞれ往復する計画だった。

初日は早朝から突っ走ったが、前しか見てなかったで左に曲がるべき所を間違えて気が付いたらオーレン小屋についてしまった。この水が素晴らしくうまかったので、秋の懇親山行にここを推薦した次第。赤岳頂上には10時に着いたが、権現への下り道は行列が出来ていてうんざり。引き返してしまった。

翌日は雨。1時間半ほどで高見石小屋までたどり着いたが、ここでビールを飲んで引き返し、午後は次男を送って渋ノ湯往復。

3日目はかねて約束の走友・田崎氏と長野



駅で待ち合わせ、戸隠へ。キャンプ場にテン張って翌日の戸隠、高妻山全山縦走に備えた。

4日目、一不動から高妻山についたところで速度の鈍った田崎氏を置き去りにし、一不動から八方睨に歩を進めたが、稜線の急な登り下りに時間を取られ、それから先の第一峰までは省略。奥社までの危険な下りに時間をとられてしまい、実働12時間の一日だった。

5日目は妙高までの移動。全装備を持っての悪路はさすがにきつく、道を間違えた上に突然の豪雨に襲われ、林道上でビバークとあいなった。

6日目、笹ヶ峰キャンプ場に朝早く着いたが、登高意欲なく火打、妙高縦走も略。こんな訳で省略ばかりの一週間でした。

こんな事をしたのも10月10日の日本山岳耐久レース（南奥多摩71・5km）に備えるためだったが、レースの結果は23時間41分、679位のていたらく。しかし、このレースの報告書は面白いよ。是非読みたいと思う方はご一報下さい。



## くぬぎ山

井草 長雄（昭48）

くぬぎ山、といっても誰もご存知ないだろう。実は我が家の近くの「山」である。

私のオフィスは皇居の半蔵門近くにあるが、そこからドアツードアでちょうど1時間半の所沢市郊外の団地に住んでいる。この我が住む鉄筋長屋は、市街化調整区域の中にポツンと建っているために、宅地開発の波は道路一本隔てたところで遮られ、周りは畑と雑木林という何とも見晴らしのいい場所にある。冬の空気が澄んだ日には農家の屋敷林の梢越しに見える富士山はもちろん、大きな空の下に道志、奥多摩や秩父の山並み、そして遠く上越の国境稜線の白い峰の連なり、浅間山までも眺められる。

学生時代は小平や国立のキャンパスの風景を見て「武蔵野の面影」というのはこういうものかと思っていたが、ここ（元禄時代に川越藩主柳沢吉保の命によって開かれた三富新田の一角で、大字神米金字業平窪という）へ

来て、本来の武蔵野の風景に出会ったようで嬉しくなったものだ。

我が家から自転車でも10分ほどのところにも広大な武蔵野の雑木林が広がっていて、その林が「くぬぎ山」なのである。見晴らす限りまっ平らで山なんか無いこの辺（だから日本初の飛行場がつくられた）では、薪炭材や堆肥にする落ち葉を採りに行く雑木林のことを昔から「山」と呼んでいたのである。

そのくぬぎ山には、めったに出くわさないが、オオタカやタヌキ、ヤマドリが今でも生息している。初夏ともなるとカッコウが家の近くまで飛んで来て、例の鳴声で目を覚まさせてくれたりもする。

ところが近年、この山を農家が相続税を納めるために次々と売却うようになって困ったことが起きてきた。

それは「山林」ということで宅地にはできないから、墓地や資材置き場、産業廃棄物焼却場といった市街地で嫌われるようなものばかりが、林に囲まれて外から見えないことをいいことにあちこち虫食いのように広がってきたのである。おかげで舗装もされていない林中の道を東京からの産廃ゴミを運ぶ大型ダンプが木の葉をかき分けるようにして頻繁に往来し、何を燃やしているのか分からない焼却場からの煙で周辺の赤松はほとんど枯れて



しまつて無残な姿をさらしている。

もちろん地域住民は黙っていなかたし、農家も口には出さないけれども弱つたなというこゝで対策を考え始めた。ダイオキシン騒ぎですつかり所沢が有名になつたのには、こういう事情があつたのである。

で、私としてもこの武蔵野の雑木林（都市近郊では貴重となつた平地林として歴史地理学的にも有名）が少しでも残つてほしいと思ひ、何かできないかと参加したのが雑木林での炭焼き作業であつた。これがやってみると実に楽しく面白いものだというこゝを知つたが、その話は次回に。

## 引地君送別会

米田 篤裕（昭55）

師走17日（木）赤坂「やしろ」にて、若手OBの会を開催。

引地真君（昭55）が、このたび「日本電産」に就職することとなり、同君の新たな門出に際しての激励が会の趣旨である。倉知、西牟

田、前神、佐藤（活）、佐藤（周）、中西、米田、宮下、稲毛、古瀬、田崎（西牟田の友人）が参加。集まりが良いなあというのが皆の率直な印象。

30歳代、40歳代といえは各社の実働部隊であり、年末は忘年会をはじめ多忙な時期。しかもショートノーティスのため連絡がついた範囲という悪条件にもかかわらず集まりがよかつたのは、さすがに不景気で暇を持て余しているせいかとの声もあつたが、やはり先年のカカボラジ峰遠征をはじめ、長年にわたり学生指導をもつづけてきた同君の貢献と人柄ゆえとの西牟田先輩の意見に皆賛同。

同君は、エヌイーディー株式会社（長銀系のベンチャーキャピタル）に勤務していたが、長銀の件（竹内宏『わが長銀の無念』「中央公論」1998年12月号は、行員の目として事情を伝えております）もあつて、進路を模索していたところ、仕事上の縁からこの門出に至つたとのこと。日本電産は、ご高尚のとおりNIDECのブランドで知られており、不況下でも高収益を上げている京セラ、任天堂、ローム、村田製作所、ワコール、寶酒造、島津製作所、といった「京都」の企業の一つ。

学生の頃、京都大学山岳部と剣沢で隣同士のテントとなつたため、地下足袋・七輪の印

..... 会員からの便り .....

塩川 清彦（昭33）

寒さつのもつて参りました。下記の所に住所変更になりましたので、お知らせいたします。

2000 Valley Forge Circle # 1225

King of Prussia, PA 19406 U.S.A.

なお東京代理

T-165-0032 中野区鷺宮3-23-4 新井方

田中 一雄（昭23）

前略 会報原稿の件ご返事が遅れまことに申訳ありません。小生この処長期間「のど手術」の後遺症の治療のため病院通いを続けており体調不調で原稿云々に手をつける気分にもなっておりません。何卒事情御了解賜度、原稿はご寛容の程お願い申し上げます。御多用中の幹事諸兄に申訳なきもいづれ将来と云うことで用紙もお預りしておきます。御健闘を祈ります。

象が強く残っているが、今や京都は優良ベンチャー企業を輩出している所。これは最高水準の追求・独創重視の文化があり、企業家に



個性があることが背景と評されており、成熟化した経済社会としての京都の土壤があるから不況下にも強いと言われる（『京都企業に学ぼう』「財界」1月10日臨時増刊号）。

引地君にとって、新しい環境とはいえ、これまでの経験とは無縁とはいい得ぬところに進路を見つけることができたことは、厳しい不況のうち続く昨今にあつては、将に有り難いことと思われました。一日も早く、地盤を築かれ、針葉樹会「京都支部」としての活躍を期待するものです。

さて、会はずすみ、年会費納入率引き上げ策、会報への寄稿協力、部室再建募金への協力と言った話題に加え、折りしも同日から冬合宿で蓮華尾根に入る学生（結局3名の一年生のうち2名が参加して計3名）の話と続いた後、香港在勤の金子晴彦先輩（昭46）が香港の山海の写真を題材に作成されたカレンダーの披露、お正月休みスキー行などの話が肴となりました。

さらに「みね」に流れて、遅れて参加した藤本、兵藤両氏を加えて二次会を開催。故中島寛先輩の寄贈された写真の前にて、深夜に至るまで杯を重ねて時を過ぎました。



## 古き良き部室を悼む

石原 脩（昭30）

部室が撤去されることになった。隣りで雨漏り防水シートを被せられた太田先生の官舎と同じ日に壊されるという。

自分が居住していた家屋が無くなる時、特に最初に大型シャベル・カーがカマキリのように頭をもたげ、ドカンとアームを振り下ろして、屋根を潰す瞬間に、人は自分の頭に痛みを覚えると言われている。

「自分の部屋」——十坪の狭い空間に、時間差をおいて何人が出入りしただろう。少なくとも、現会員＋物故会員＋現役の三〇〇人は、各人が、一時は「自分の家」だと思っていたに違いない。なかには本当に住みついた人もいる。

「青春の宿」——昭和二十七年頃、東京女子大に山岳部が誕生し、そのリーダーが二人ほど連れだって部室に現れた。男女七歳にして席を同じうせずの世代の部員達にとって、これは衝撃であり、あとから匂いがすると嗅ぎまわる奴もいた。

部誌には時代を超えた若さが連綿と続いている。狭い部室は「三百人の青春の蔵」だった。

「墓碑銘」——往時、部室の壁の上段に、友田、前田、吉沢、長沼、田中の遭難死した五人の方々の、何時までも若い写真が飾られていた。

創立以来七十五年で物故会員は九十名となったが、未だに部室に行けば、時間を超越して想い出の中で会うことが出来る。部室は永遠に通り過ぎた部員を若い儘に憶えている。

○  
新しい部室は、平成十一年三月生まれとなる。

外観は明るく、周囲も初代部室と違って、樹木も少なく、内部にトイレがあるので周辺の草も茂りそうにない。しかし、東面・北面は大学構内の雑木が空高く生い茂り、二代目部室の入口の西面には桜の大木がある。明けて十一年四月に竣工披露の「花見の宴」を開



くとか。是非OB各位の総見をお願いしたい。

内部は、流し・湯沸し・シャワー等が加わって居住性を増しているが、居室と本棚そして中二階の基本構造は全く変わりはない。一時は住家を失った九十人の魂も、また各人の想い出も何時しか移り住んでいくものと思われる。

一九三〇年生生まれの初代部室は、六十九歳で終わるが、このような長寿の堅牢な建物を「ご寄贈いただき、また、大学からのあてがい

扶持の部室とは全く異質な独自の澄んだ想い出を後輩に与えて下さった磯野計蔵先輩（昭六年卒）の霊に、改めて御礼を申し上げたい。柱が傾きだした部室に別れ、二代目の建築の検討に立ち合ったOBの胸には、こんな想いがよぎったようだ。「ワンゲル等を含め、一橋に山好きの種が尽きることはない。そして、この山小屋が山岳部存続の基礎になれば幸甚だ」

当時の部員の気構えと、今昔の差は測り難いほどかけ離れ如何ともしがたいのですが、建て替えはまた時代の流れともいべきめぐりあわせでもありましょう。（編集子）

## 部室再建計画の経緯と現状

現在の国立部室小屋は一九三一年五月下旬の建立であり、その建設に至る経緯は増山清太郎さんが針葉樹会報・復刊60号に寄せられた「部室50年——建設経過を中心に」に詳しく述べられています。対華21ヶ条要求による日本軍青島攻略時のドイツ人捕虜が作った組立て四阿屋がきっかけとなり（磯野さんが買

部室再建担当幹事 西牟田 伸一

って寄付したが使えず。ついでに寄付された組立費に加え募金をして別の小屋を建設した）、あの小屋を建てる気運がおこったという経緯や、当時八〇〇円要した建設費用の資金計画の苦労話の中で学生が二九〇円も捻出負担したという建設時の背景を忘れてはならないと思います。自立心と進取精神に富んだ

しかし、法学部教授で山岳部長でもあった勝田有恒先輩が当時の会報に現部室が「国有財産として認知されていない違法建築である事、再建が法的には困難である事」を書いておられます。

時代は下って平成8年、カカボラジ遠征の本隊派遣断念を決定した頃、私は部室再建に対して大学側が柔軟な姿勢をみせているという話を聞き、自ら部室再建担当幹事になることを評議員会に具申、承認されました。しかし、山岳部員が減少する一方の昨今の現状をみれば、「無駄な投資になる」との意見も強く、なかなか衆議一決というわけではありませんでした。



平成9年秋、学生の宗像君があらためて大学当局に部室再建の可否について打診したところ、「現在の場所は将来の利用価値が高いので、別の場所であれば再建を許可する」との回答を得ました。我々が危惧していた大学構内における山岳部の既得権益つまり部室の地上権があつさり認められた事になります。その後、97年12月19日の臨時評議会、98年1月23日の新年会、定期評議会、定期総会と論議を積み重ねてきて部室再建の運びとなったわけです。

一方、対外的にも計20社ほどに設計原案を提示し、建築費見積りを依頼しました。最初、カナダ産のログハウス業者の見積り（建坪30㎡500万円）が最良と思われたのですが、東京三菱銀行国立支店が紹介してくれた地域の「古溝建設」に落ち着きました。最近になって聞いた話ですが、太田可夫先生のご遺族が国立に建てられた家も古溝建設が建てたものだそうです。

建設地は国立西キャンパス南西隅、最近まで大学構内の建設残土を積み上げた雑木林の一隅でしたが、小平キャンパスにあった座禅道場「如意団」が移転してきたため、98年7月に整地されています。この如意団のおかげで我々が本来払うべき電気、上下水道のインフラ建設費が節減されています。現場は周囲に

桜の樹が多いところです。

大学側には10月1日に正式に申し入れ、同月17日に部局長会議、21日に施設委員会、11月11日に教授会と、いずれも承認されました。阿部謹也学長は現在の日本の大学山岳部の状況をよくご存知であるため、山岳部部室再建には否定的であったようですが、石弘光教授の「今後の山岳部活動、部室の管理には針葉樹会が責任を持つ」との言葉により動かされた、と聞いております。

#### 【現状】

11月24日、大学側関係者（学生部主計課長、施設課長、学生課長）と古溝建設と西牟田で打ち合わせをおこない、構造上の問題点を検討してもらいました。それらの結果を織り込んだ仕様にて、消費税込み総額600万円の建設費で12月11日、古溝建設と契約書を取り交わしました。

また、旧部室の取り壊し撤去費用も針葉樹会で持つように言われていましたが、これは学校側が進めている旧太田可夫先生校宅の取り壊し作業と一緒にお願いする（分担金を払う）ことで決着がつかしました。したがって、早く着工完成して引越す必要があります。

#### 【今後の予定】

99年1月10日頃、部室建築に着手し、学生

#### ……… 会員からの便り ……

#### 関 恒義（昭23）

前略 11月中に返信を、ということですので、あわてて書きます。実は私が一橋大学の山岳部長をしていましたときに、アンデス初登の問題がもちあがり、そのための費用集めで、寄付を頂くために、だいた企業めぐりをやり、苦労しました。現在は、海外での登山は自費を原則としているようで、費用集めで苦労することはないようですが……。

このアンデス行きの件で、吉沢さんや中島君にしばしばお会いしました。そのときの思い出もありますが、とくに中島君とは、彼の結婚のことで、その後も何回かお会いすることになります。

実は、山岳部長のときの最も重大な事件は、山岳部員が鹿島槍で遭難死したことです。そのとき中島君が責任者となって苦労してくれました。その結果？この山岳部員のお姉さんと中島君は結婚することになりました。私にとりましては不運と幸運の双方がうまれたような気持ちを感じたことを思い出します。中島君なきあとご家族の皆さんのご健勝を心から祈念いたします。私は61歳で肺気腫となり山には登れない体になりました。



の勤労奉仕を受けながら（2人×10日、および塗装工事）、遅くとも3月20日には完成、4月の初めには花見をかねた完成披露の宴を開けるものと考えています。

### 故中島寛さんの追悼号原稿募集

次の88号は中島さんの追悼特集です。編集の基本方針として、①同氏が会の活動に様々なかたちで広く貢献され、多くの会員の皆さんに深く影響を残してこられたことを考え、会員全員、特に同世代以降に広く執筆をお願いし、短くてもそれぞれの触れ合いなどにつき思い出を述べてもらい、全体として同氏の針葉樹会における存在がそれなりに浮き出るような追悼集にしたい、②エベレスト登山をはじめ、内外の山岳界に残した足跡は大きく、それ無しでは全体像をつかめなく、欠けるものとなることを考え、会員外にも、いくつかの観点から主要な活動の接点になる方々を選び、数名の外部の登山家に寄稿を依頼したいと考えています。中島さんとの交友や関わりを、袴を着ない「個人的な思い出」の切り口で書いて投稿してください。枚数は自由です。

原稿締め切り 2月中旬

88号発行予定 4月中旬

### 編集後記

一九九八年は悪い年でした。アジア経済の混乱と日本経済の未曾有の経験はご存知のとおりですが、我が針葉樹会も吉沢一郎さんと中島寛さんの二人の巨星を失ってしまった年でした。が、新しい胎動の兆しが見え始めています。紆余曲折、賛否両論があった山岳部部室の再建計画は、推進された関係者のご尽力あつてのことですが、時宜を得て急展開し、実現の運びとなりました。針葉樹会と山岳部の相互の求心力の役割を担ってくれるでしょう。

時を同じくして、針葉樹会報も衣更えをします。予算が足りないため、今回（87号）のスタイルに変えました。同時に内容も直近の会員情報交換に重点を置くことになりました。一橋山岳部出身者のアイデンティティ再発見の場を提供できればと思います。その意味で全員参加が望まれます。

第一回目の試みとして、一番のご長老から昭和三十四年卒までの世代の方々のなかで、常連以外の方々に焦点を絞って、切手付き返信用封筒まで用意するなどお膳立をした上ご執筆のお願いをしました。結果は無惨というべきでしょう。書いてくれるだろうかと、編集者は気をもみましたが、応募くださった方はたった六名のみ。他の人達はさらに往復ハガキでお願いしたにもかかわらずほとんどナシノツブテ。幹事はあわてて他の方々にも声をかけ、苦勞して原稿をそろえました。しかしながら、そうして集まったものは目を通していただければお分かりの通り、それぞれが会報に自身の居場所をつくっています。所詮、編集というものはこんな調子で続けるしかないでしょう。

次の号は中島寛さんの追悼を中心にまとめます。中島さんは「将器」「逸材」「人間の男」など、どんな形容詞をもってしても、魅力的な等身大の実像を容易に表現できないほどの人でした。日本山岳会は、次期会長候補の切札として、中島さんを温存していました。今さらながら惜しまれてなりません。そんな大きな存在でしたが、彼が最も大事にし、軸足をおいていたのは、登山家として揺籃期を過ごした一橋山岳部と針葉樹会とのかかわりでした。

（中村 保）